

書評・紹介

Luis O. Gómez

*The Land of Bliss: the Paradise of the Buddha of  
Measureless Light, Sanskrit and Chinese Versions of the  
Sukhāvastvīya Sūtras*

兵藤 一夫

『阿弥陀経』『無量寿経』は浄土教の根本聖典として東アジア、特に中国・日本、において広く親しまれてきた経典であり、それらの解釈や儀礼における使用などに大きな伝統を形成してきた。また、西洋の仏教研究においてもこれらの大乘経典はその重要性の故、早くから注目され英訳もなされてきた。

本書は東本願寺真宗大谷派の要請を受ける形でアメリカ・ミシガン大学のゴメス教授が『阿弥陀経』『無量寿経』の英訳研究にとりかかったその成果の一端であり、著者も予告しているように、引き続き二巻からなる専門的な翻訳研究が出版されることになっている。したがって、当該英訳研究は第一巻の自由訳 (free translation) と第二・三巻の専門的翻訳 (technical translation) の全三巻からなるものである。これらの全体的な書評や紹介は第二・三巻が出版されてから行われることになるであろうが、重要な英訳研究であるので、とりあえず第一巻の

みを通して当該研究の特色の幾つかを紹介することにする。

まず、「はしがき (Preface)」に基づいて經典翻訳に対する著者の基本的態度の一端を要約しておく。最初に著者は、『阿弥陀経』『小経』、著者は短経と略称) と『無量寿経』(『大経』、著者は長経と略称) はインドの豊富な文学的宗教的想像力に満ち、古代インドの文化や信仰体系に深く根づいた抽象的概念や強烈な感情にあふれた偉大な宗教的古典であるが、われわれ (欧米人) と經典との遠さ・別異性を指摘する。この遠さ・別異性は欧米人に限らず、二つの經典の伝統を持ちそれらに親しんでいるとされる日本においても多くの人々に妥当することであろう。著者によれば、二つの經典はこの世界とは別な理想的世界 (浄土) について語ったものであると同時に、時間・空間によってわれわれとは異なった文化的な宇宙 (古代のインド・中国等) からのものである。このように二つの經典は二重の意味でわれわれのものとは異なった宗教的テキストであるので、それらがわれわれ多くの者と共通な願望や価値を表現しているとしても、それらを完全に理解し鑑賞するには幾つかの準備、基本的な道具を身に着けること、が必要である。(pp. ix-x)

この遠さ・別異性を和らげるために訳文の工夫や序論・注記等が活用される。著者は、序論や注記等翻訳に際してなされる努力は、經典という未知なところへ旅する者のためのガイドの役割をする、と述べている。(p. x) また、次のようにも語

っている。それ単独で存続し得る翻訳のようなものは存在しない。実際、テキストは、解説や注記などの補助テキストやそれが仮定する世界なしで、それ単独で存続し得ない。注記を抑制しようとすることはできるが、序論や注記は学者の気まぐれの産物ではなく、それらは不完全ではあるが古代のテキストが仮定している世界を現代の読者に伝えようとする試みである。

(p. xix)

われわれは經典がさまざまに使われること、その文脈・意味が多様であることに留意しながらそれらの經典を理解しなければならぬ。そして、翻訳者・解釈者・読者である現代のわれわれは、それぞれの文化的個人的世界に住んでいるが、その世界は一部はテキストそのものの複合した歴史から離れており、一部はテキストそのものに残っている世界の痕跡を通してテキストの世界につながっている。このようなテキストとわれわれの関係の中で、ある程度の開放性を維持しながらテキストを理解することがどうして可能であるのか。著者は次のように答える。ここに示される方法と翻訳のスタイルは、これらのディレンマを解決しようとするものでもそのままにしておこうするものでもない。解釈というこの障害ある道を進んでいこうとする読者を手助けするものであって、障害を取り除こうとするものではない。(p. xiii)

このことに関して著者は「結びと移行 (Epilogue and Transition)」において次のようにも述べている。翻訳という概念は原テキストの背後に隠れた不変で明確な意味を発見する

という希望を持たせるかも知れないが、短経や長経は複雑で多層なあり方をしている。本書では、序論・翻訳・注記によってそのことを示し、テキストのイメージの世界の方向を指示し、經典の注釈者たちが示そうとする並行した世界にも触れている。しかし読者は一方で統一の感覚、閉じた合理的秩序の感覚を求める。テキストの意味を構成することによってこの統一を与えるのは一部分は解釈者・翻訳者の仕事である。したがって、序論において提示された二つの經典の解釈は、テキストの文法的物語的構造が多重のイメージと希望の世界について示唆していると著者が考えるものに基づいたそのような統一の試みである。

ところで、著者はアメリカで大学の学部学生（仏教の基礎的知識を持たない者）に仏教を教える経験を踏まえて、古典的な仏教テキストの学問的翻訳はそれ自身障害を作り出すことに注意する。仏教テキストの英訳は英語というよりもサンスクリットの混ざったサンスクリットのな英語が多く、われわれ仏教研究者もそれを用いることに慣れ親しんでいる。また、仏教の基本的事項などの説明もサンスクリットを参照すること、いわば原典の言語に訳し戻すこと、よって行われがちである。これらのことは結果的に仏教の理解の障害になっていると言うのである。そこで著者は一般の読者向けと考えられる自由訳においては次のような方針を立てる。翻訳の中ではある程度の言語の混淆は避けられないものではあるが、サンスクリットに戻るのではなく英語での言い換えを試みる。説明が必要であってそれが經典のテキストに織り込まれ得ると考えたときはいつでも、

説明的な言い換えを、脚注に移管する代わりに、テキストの中に挿入する。これらのことは、テキストを勝手に変えないという学問的翻訳における習慣を破ったこと、ある程度は原典のリズムや調子を変えたこと、を意味している。しかしこのことによつて著者は、新造語や外国語、文献学的注記をできるだけ避けることができたと見るのである。(p. xiii) 著者は「結びと移行」において次のようにも述べている。これら二つの經典を読むとき、それらは宗教的な主張だけでなく文学的想像力の作品とも見える。著者自身ダンテや下界と天国・地獄の景観に関する西洋の文学的伝統を考へることなしにそれらを読むことは不可能であり、またユートピアについて、地上や天の樂園について、それらの社会について、そしてそれらの文学的設定について西洋の伝統を考へざるを得ないと語る。(p. 113) その立場の下で、著者は序論において「極楽」に対して Amitābha's paradise と表現するが、翻訳の中ではその語を用いず、the Land of Bliss, Pure Buddha-land, あるいは the buddha-field 等を使用している。

自由訳におけるこの読みやすさの獲得は、一方では仏教聖典の異国的であいまいな味わいと異教的なスタイルや専門的調子の幾つかを失なうことになる。しかしそれでも著者は自由訳の持つ意義を次のように強調する。自由訳の目的が読みやすさばかりやすさである限り、結果は代価を払うに値するであろう。特にこれら經典の不思議さや楽しさに近づくことを英訳に頼らなければならぬ人々にはそうであろう。自由訳の読者でもや

はり仏教聖典が荘厳で神秘的で崇高であつてなお幻想的で遊び心があるそのあり方を経験することはできるであろうと信じている。読者は失われたニュアンスや調子のいくつかをやがて出版される専門的翻訳から取り出してくれるであろう。(p. xiii) 仏教テキストを翻訳するに際してもう一つの問題は、その難解で専門的な文体である。著者は、仏教テキストが無数の概念、信仰体系、教義リストを背景にしたフレーズや短縮された術語に満ちており、しかもそれらの意味が他の著作や教義に依拠していることを指摘する。そのためにも最少限の注記や説明は求められるのである。(p. xiv)

第一巻である本書は自由訳であり、著者の言によれば「手ほどきを受けていない読者が複雑な専門的注記なしでこのテキストにアクセスできるように」その構成が工夫されている。まず、目次によつて全体の構成を示しておこう。

Preface (序言)

Part I: The Sanskrit Versions (サンスクリット版)

Introduction to the Shorter Sutra (短経に対する序論) 3

The Shorter Sukhāvātyūha Sutra (短経の翻訳) 15

Introduction to the Longer Sutra (長経に対する序論) 23

The Longer Sukhāvātyūha Sutra (長経の翻訳) 61

Epilogue and Transition (結びと移行) 113

Part 2: The Chinese Versions (中国版)

Introduction to the Chinese Versions (中国版に対する序論) 125

The Shorter Sukhāvayūha Sutra (『阿弥陀経』の翻訳)	145
The Longer Sukhāvayūha Sutra (『無量寿経』の翻訳)	153
Note (注記)	223
Appendices (補遺)	255
1. Diagrams (図)	255
2. Tables (表)	261
3. For Further Reading (参考文献)	269
4. Glossary (語彙)	279
5. Index (索引)	335

この目次からも明らかのように、本書はこれまでの翻訳書にない幾つかの特質を持っている。まず第一に、短経(『阿弥陀経』)と長経(『無量寿経』)のサンスクリット版と中国版がそれぞれ別々に英訳されていることである。第二に「序論(Introduction)」が三度書かれ、しかも第一部と第二部の間に「結びと移行(Epilogue and Transition)」と「うつつなぎの論」が設けられていることである。第三に「補遺(Appendices)」の内容である。

短と長の二つの Sukhāvayūha Sutra はサンスクリット版と複数の中国版とチベット版が残されている。仏典を現代語に翻訳する場合、サンスクリット原典が残されていればそれを底本として他の中国版(漢訳)・チベット版を参照する形が一般的であるが、これら二つの経典に関しては事情が異なっている。周知のように、これら二つは阿弥陀仏と浄土の信仰の根本的な所依の経典として東アジアで広く普及してきたが、その際使わ

れたのが中国版(漢訳)であり、また、長経はサンスクリット版と中国版の内容にかなり大きな相違が見られる、という特別な事情がある。特に、サンスクリット版にはなくて康僧鑑訳などの三つの中国版にのみ見られる「三毒五悪段」をどう取り扱うか考えなければならぬ。ちなみに、これまでの翻訳では、Max Müller 訳 (*Buddhist Mahāyāna Texts: The Sacred Books of the East*, vol. 49, 1894) はサンスクリット版からの英訳で「三毒五悪段」は含まれない。藤田宏達訳(梵文和訳無量寿経・阿弥陀経一九七五)はサンスクリット版からの和訳であるが、康僧鑑訳と対照させているので、当該部分との相違を参照することができる。また、山口益他訳(『浄土三部経』大乗仏典6、一九七六)はサンスクリット版からの和訳であるが、最後に康僧鑑訳の当該部分の和訳を追加している。このような事情を考慮して、著者は短経と長経をサンスクリット版からだけでなく、鳩摩羅什訳『阿弥陀経』(短経)と康僧鑑訳『無量寿経』(長経)からも英訳することにしたようである。そのあたりの事情についての著者の説明をまとめておく。なお、サンスクリット版と中国版との相違に関しては、後に序論を紹介する際に再度触れることにする。

この二つの経典は多分インド北部の辺境(現在のパキスタン)で、少なくとも一七〇〇年前頃に作られたであろう。サンスクリット以外のインドの言語によって書かれたと想定する者もいるが、現在に残されているインド版はサンスクリットで伝えられている。それらの初期の形がどんなものであったとして

も、現存の版は伝承の過程で多くの変化を蒙ってきたに違いない。また、これらの経典は何度か漢訳され、チベット訳も残されている。したがって、これらのテキストは多くの世紀を越えて多くの形で我々に伝えられてきたのである。多くの形とは、それを伝えてきた言語が数種類にわたり、しかもそれぞれの版が一つ以上あることである。さらに言えば、その物語の読み方、経典の形式と内容の見方が一つ以上あることもある。実際、形式と内容は経典が読まれ使用されてきた文脈にしたがって変形されている。そして二つの経典は広まるにつれ、個別にあるいはセットとして、儀式において朗唱されるなど実際面で使用されていくのである。(p. xii)

著者はまず最初に二つの経典のサンスクリット版を翻訳し、次いで鳩摩羅什訳『阿弥陀経』と康僧鎧訳『無量寿経』を翻訳する。短経・長経はインドの外部、すなわち漢訳を通して伝えられた東アジア(特に中国・朝鮮・日本)で最も大きな影響を及ぼしたので、その際最も普及した漢訳からも翻訳することにしたようである。(p. xi)

漢訳は『浄土論』を初めとする中国撰述の注釈書とともにわれわれがこれらの経典を理解するための重要な源泉である。われわれが現代これらの経典を読む場合、中国における解釈の伝統、それを引き継いだ日本人僧侶・学者の著作を通して伝えられてきたものの影響を無視することはできない。(p. x)

次に「序論」も含めた本書の構成についてであるが、先の経典翻訳の基本的立場を踏まえて、従来の翻訳書に執られない方

法が取られている。著者によれば、自由訳と専門的翻訳を含めた三巻全体の構成は二つの経典を理解するための多くの踏み石が敷設されるように意図されている。教説の中心テーマや主要な文学的モチーフは自由訳の序論と訳文の中に示される。序論の中に解説を集め注記を最小限にすることにより読者は英訳の経典そのものを楽しむことができる。そして専門的翻訳の第二・三巻においては、自由訳では単に示唆されたにすぎない翻訳の背後にある学問的考察、年代・歴史・言語・文体などの事項、自由訳の序論によって提起された幾つかの問題などについて、最近の解釈理論や方法論の問題にも注意を払いながらより詳細に検討される。(p. x)

本書(自由訳)には序論が三度現れる。サンスクリット版の短経に対する序論、同じくサンスクリット版の長経に対する序論、そして中国版に対する序論である。著者によれば、これら三つの序論は段階的につながっている。最初の序論は短経の神話やイメージに対する短い一般的なもので、二番目は読者に長経の内容を親しませ短・長経の共通点と相違点を強調するものである。三番目の序論は短・長経の東アジア(特に中国・日本)での伝播について語っている。したがって、短経のサンスクリット版の序論と自由訳は長経の序論と自由訳の前文の役割を持ち、それら二つのサンスクリット版の序論と自由訳と「結びと移行」の一文はまた、順次、中国版の自由訳、さらには専門的翻訳やその注記や序論に対する踏み石として提供されているのである。(p. xi)

最後に、「補遺 (Appendices)」の内容についてであるが、そこには図表・参考文献・語彙がまとめられ、序論や注記と相俟って仏教の基本的知識、經典の文脈を補う補助テキスト、經典諸版の比較などをわかりやすく提示している。たとえば、図では須弥山を中心とした世界の構造図、著者の描く極楽のレイアウトなど、表では長経諸版の誓願・五悪段等の相違やサンスクリット版と康僧鎧訳との誓願の対照表が判りやすく示されている。

以下に、三つの序論と「結びと移行」についてその内容を紹介してみたい。その際、著者自身が細項目を立てて論を進めているので、筆者の言及する個所の項目名を示しておく。ただ、紙幅の都合があるので紹介する個所は筆者が特に興味を覚えた幾つかに止める。

#### 〈短経に対する序論 (Introduction to the Shorter Sutra)〉

著者は最初に二つの經典のテーマとタイトルについて触れている。二つの經典は短・長の別はあるが基本的には同じテーマを共有していると考えられる。サンスクリット版ではどちらも同じタイトル "Suhāvatīvyūha Sutra (極楽の莊嚴についての經典、あるいは極楽を莊嚴する經典)" を持っており、中国版のタイトル『阿弥陀經』『無量壽經』はその樂園を主宰している仏陀の名前、阿弥陀・無量壽に焦点を当てたものとなっている。これらの經典は二つの世界、われわれのこの世界と阿弥陀の淨土、をリンクしている。すなわち、苦に満ちたこの世界の

われわれ (聴衆) に対して、釈迦牟尼仏は物語を通して遠い樂園、阿弥陀の極楽を提示している。(The Two Texts and Their Titles, p. 4)

短経の物語の構造は、釈迦牟尼仏が弟子である舍利弗に阿弥陀仏とその淨土について語るという単純なものであるが、著者はこれを幾つかの声・見方・人物によって織りなされたテキストトとして読むことも可能であるとする。釈迦牟尼仏一人ではなく、經典の語り手としての阿難、阿難もそこに含まれる対告衆 (比丘・阿羅漢・菩薩・天の有情たち)、対告衆の一人で仏陀の対話の相手ともなる舍利弗、釈迦牟尼仏に呼び出された十方世界の仏陀たち、そして阿弥陀仏とその淨土の住人たちによっても織りなされたものとして、である。(The Shorter Sutra: A Preview, p. 7)

經典の物語は伝統と神話の世界に設定される。これらに接近するには、そのような物語が生み出された背景、すなわちその世界やそこに住んでいる人たちの持つ前提を知っておかなければならない。この短経にも現代の西洋の世俗世界と比べて多くの前提の違いが見られるが、著者は、中でも二つのことが重要であると語る。われわれは生前の善悪の行為の報いとして死後もさまざまな存在形態を取りながら再生を繰り返すこと (輪廻)、そして道徳的精神的完成を獲得することによってこの苦しみの終わりのない循環から解放されるということ (解脱) である。大乘仏教文献の多くは二つの事柄、人間が仏陀や菩薩の完全さを獲得する方法と仏陀や菩薩が他の有情たちの苦からの

解放を手助けする方法、に向けられている。短・長経におけるこれら二つに関する具体的な表明は仏教の信の特別な教義として定義される。その際、二つの経典は教義的な説明を用いるよりも物語的な描写や叙述を用いて表現している。(p. 8)

その他、仏陀・仏国土、一仏・多仏などの観念についても知っておかなければならない。仏教においては仏陀はシッダータ・ゴータマという歴史上の人物(釈迦牟尼仏)ただ一人ではない。特に大乘仏教においては、釈迦牟尼仏は重要な一人であるが多くの仏陀たちの中の一人であり特有な存在ではない。短・長経においては釈迦牟尼は代弁者、啓示の伝達者として働いている。したがって、われわれが仏陀(釈迦牟尼仏)の教えと見なしているものは多くの仏陀たちの教説の一つと考えられるのである。(The Behind the Story, p. 9)

著者は短経の最後のところで短経の別名が示されることに注目している。そこには釈迦牟尼自身によって「一切の仏陀たちによって撰受された経」というもう一つの題名が提示されているのである。そのことの意味を著者は次のように捉えている。一切の仏陀たちの誓願は有情たちを撰受する救済力の源泉であり、他方、われわれ有情はそれら仏陀たちの誓願によって撰受されるのである。短経は阿弥陀仏とその仏国土(極楽)の称赞が主要なテーマであるが、もう一つの題名は、多くの仏陀たちが阿弥陀仏と似た力を持っていることも暗示する。このことは長経における阿弥陀仏中心のそれとは非常に対照的である。

(Embraced by All Buddhas, p.13)

#### 〈長経に対する序論(Introduction to the Longer Sutra)〉

著者はこの序論において、法蔵菩薩の物語に焦点を合わせながら二つの経典(特に長経)で展開された物語の神話的文学的背景を見直すこと、阿弥陀仏の極楽の描写・そこへの往生の性質、大乘仏教の一般的教義や実践(行)の中でのここに示される信の位置を考察している。

文献の内容の上で長経と短経を比較した場合、著者は、ある面では長経は短経の拡張として見られるとし、次のように語る。二つの経典において阿弥陀仏とその浄土は現在に実在するものとして現れている。しかし短経ではそれらは歴史を持たないかのように現れるが、長経はこれに歴史を与え、阿弥陀仏の覺りと国土の浄化のための原因と条件を描写することによって物語を時間の中に拡張している。長経は極楽をより詳細に描くことによって、そして経典の終わりに向けて釈迦牟尼とその弟子たちの目の前に極楽の景観を示すことによってその像を空間に拡張している。また、短経では示されなかった信と精神的達成の階梯を確立することによってテキストの教義的規定的な内容を拡張している。(The Message of the Two Sutras, pp. 23-24)

著者は、長経においては阿弥陀仏とその浄土が一般的な大乘の教えの中にはつきりと位置づけられていると語る。長経には、阿弥陀仏がかつては法蔵と呼ばれる菩薩であり、極楽は彼の莊重な誓願と覺りを獲得しようとする努力と実際に完全な覺りを獲得したことの結果であることが説かれている。菩薩道という大乘仏教の共通の教義がこの聖なるドラマの筋を進める手助け

をする論理の一部として用いられる。法蔵菩薩は有情たちが努力なしに解放を獲得することができるであろう不思議な国土を創り主宰することを誓願した。その結果、有情たちは純粹な幸せを享受し容易に解放を獲得することができる場所を持つことができるようになったのである。法蔵菩薩はその時自らの誓願を四十七の特別な誓願の形に再定式化することによってその約束を拡大した。彼はその誓願に基づいて限りなく長い期間自己修養と自己犠牲を繰返し、多くの仏陀や菩薩たちの国土を訪れて無量の功德を積んだ後、自らの国土を莊嚴な「極楽」にすることができた。それゆえ、長経はわれわれを苦行の仏教から信の仏教へ、困苦の経歴を要する菩薩行から菩薩の力による救済に対する信へ導く。また、神話的過去になされた莊重な誓願から現在の阿弥陀仏と極楽の実在へと導くのである。(The Story, pp. 25-26)

このような長経の物語を理解するためには、短経の場合に加えてさらに幾つかの前提となっているものを考慮しておかなければならない。そこで著者は二つの事柄を考慮に入れる。人間の善い行為はその人に功德を蓄積すること、そしてその功德は他者や覺りへと振り向けることができること(廻向)である。大乘仏教においては、功德と呼ばれる精神的な資本は覺りというゴールあるいは一切の有情の解放へと捧げられ振り向けられる。それゆえ、自己努力は自らの覺りだけでなく他者のための功德へと転送あるいは変形される。この「功德の廻向」という觀念が仏陀や菩薩たちを、自己修養の困苦の道による覺りの獲

得のモデルから「有情の救済者」なるものへと変えていく。長経において、法蔵菩薩自身彼の無限の功德を極楽の創造に振り向けることによって新たなゴール、すなわち阿弥陀の浄土に有情が往生すること、を創りだす。極楽はいわば、そこに往生する全ての者たちのための法蔵菩薩の功德の貯蔵所となっている。(Faith in Salvation, p. 27)

次いで著者は極楽とそこへの往生の根本的な原因について考察に向かう。有情はどのように再生(往生)するかということに關しては、二つの概念、行為の報いと功德の廻向ということ、が絡み合っている。人は過去になした善悪の行為によりその再生の境涯が決定される。善ければ天・人のように楽の多いあり方で、悪ければ地獄・餓鬼・畜生のように苦の多いあり方である。しかし善い行為は、それによる功德を振り向けることにより、現実を変える効力を持っている。原理的には功德はその所有者の運命(再生のあり方)を形作るため、彼はその功德の自然的な結果として将来の幸福な生を享受することができるが、自らの功德を覺りの獲得あるいは他者の覺りへの決意を支えるために用いることもできる。ある仏国土に再生(往生)するという場合、仏国土の性質とそこに再生することは全て人間の行為によって決定される。仏国土の形状と内容は、そこを救済のための国土として選んだ菩薩の尋常でない功德によって決められ、そこに再生する能力は信者の功德によって決められる。短・長経においては、信者の信が極楽への往生の決定的な要素である。しかし往生の根本的な原因はやはり阿弥陀仏の誓願と



功德である。功德の獲得や浄土に往生しようとの堅い決意を定式化することの中で、多かれ少なかれ、信者にも努力が求められるであろうが、やはり全ての努力の成就是阿弥陀仏自身の誓願の成就においてなされるのいである。(Harnessing the Power of Merit, pp. 30-31)

短経に対する序論においても触れたが、著者は、短・長経における釈迦牟尼仏の役割に注目している。釈迦牟尼仏は二つの経典においては仲介者として活動している。彼は一切(三世十方)の仏陀たちと同じ共同体のメンバーであるから、その役割を引き受けることができる。全ての仏陀たちはお互いにその性質と知識を洞察することができるのである。このことが経典における釈迦牟尼仏の啓示を可能にしている。長経の初めに描かれる釈迦牟尼仏の神々しさは後に彼が啓示すること(阿弥陀とその浄土についての教説)の正当性を告示し証明する。同時にその釈迦牟尼仏の不思議な出現は彼の教えによってわれわれの世界を変えること、浄土の啓示を告示し、最終的に目をくらませるほどの阿弥陀仏の實在を告示するのである。

(Shakyamuni Buddha as Intermediary, p. 33)

長経における法蔵菩薩の誓願は故意にバラドックスの形をとっている。著者は捉え、次のように語る。法蔵菩薩は、もし彼が覺りを獲得し国土を浄化した後約束が守られなかつたら覺りを獲得しないと誓う。これは二つの事実を表明していると考えられる。法蔵菩薩が阿弥陀仏になったという神話的出来事の持つ暗黙の無時間性と菩薩の聖なる力とである。誓願は約束した

者が完全な菩薩であることによりその成就が保証される。実際、彼は誓願をする時すでに完全な菩薩であり、そしてわれわれが彼の誓願の物語を聞く時彼はすでに完全な仏陀となっている。無量の時間を隔てた過去において法蔵菩薩は誓願を起し、無限の期間功德を積むことによってその誓願を成就し阿弥陀仏となり、極楽を完成したのである。

長経には、極楽に生まれた者たちは全て阿弥陀仏がその下で正覚を得た菩提樹を見た瞬間に不退の者となり無生法忍を得ることになると述べられるが、それは無量寿如来によって以前になされた誓願の不思議な力によって、過去の仏陀たちへの彼の供養によって、そして彼の以前の誓願と実践が成就し欠けることや欠点なく完全に修養されたという事実によって可能であることが示される。著者によれば、この解釈は菩薩と菩薩道の概念を經典自身が曲解している。長経は伝統的な菩薩・菩薩道の概念から離れようとしている、すなわちこの世界での解放というゴールから離れ至福の樂園での救済の希望へと動き、菩薩道における自己修養の伝統から離れ仏陀・菩薩たちによる救済の慈悲への希望へと動いている。長経には、極楽に往生した者でも伝統的な菩薩道に従って他の仏国土の有情利益のために困苦の道を歩むことのあることが述べられているが、多くの者たちは極楽に止まり約束された通りにそこにおいて覺りを獲得するのであるうし、それこそが經典の趣旨に適うものである。(The Paradox of the Vow, pp. 37-38)

著者は長経におけるいわゆる「法蔵菩薩の物語」の解釈に新

しい視点を持ち込んでいる。東アジアの伝統では、この物語の部分は經典の核となる主要なメッセージであり、仏教徒たちの信を証明し鼓舞するテキストとして歴史的重要性を持っているが、読者と經典の残りの部分との弁証法的関係の中でこの部分を見ることの重要さを指摘する。その観点からすれば、法蔵の誓願は確立された伝統（自己修養の菩薩道）から作られたものである。誓願は、長経が一般的な大乘の信と神聖化されたイメージを信とその対象の具体的なイメージ、極楽、へと変形するときの依り所とした支柱である。

テキストと読者の弁証法の観点からは、誓願のパラドックスが阿弥陀の存在と無時間性を信者の信に結び付ける方法が重要である。釈迦牟尼以前の時間にこの信の源泉を置くことによって、誓願は新しい信に一層高い権威を付与している。新しい教えは最も古い教えであると宣言されるのである。法蔵物語と經典の残りの部分との関係の観点からは、誓願は阿弥陀の独自性の最初のはっきりとした表現である。それら誓願は經典によって勧められる信の具体的なあるいは明確な対象を定義する。それゆえ、誓願は、それらが法蔵の人格を定義するときでさえ、読者に読者個人のアイデンティティを付与する。

また著者は次のようにも語る。誓願の具体性は自然に極楽の具体性とその景観の現実性へと読者を導く。それゆえ誓願は自然に阿弥陀と極楽の描写を導き出し、この描写が逆に誓願に対する一種の注釈として作用する。そして極楽（浄土）の存在は

法蔵の誓願の正当さと誠実さの証明であり、法蔵の前世についての釈迦牟尼仏の説明が真実であることの証明でもある。  
(The Longer Sutra: A Preview, p. 56-57)

ついで著者は阿弥陀仏を観ることの意味を考察している。極楽の描写は阿弥陀仏の描写と阿弥陀仏を見ることと密接からんでいる。釈迦牟尼仏から阿弥陀仏とその国土の詳しい描写を聞いた後で、阿難はそれらを自らの目で見たいと世尊に告げる。阿弥陀仏は釈迦牟尼仏の代わりに阿難の求めに応じてその姿を現す。彼の応答は無言であるが圧倒するものである。彼の無限の光は、釈迦牟尼仏・阿難・そしてわれわれ読者聴衆としての者がいるわれわれの世界を満たす。物語の最後の部分、弥勒菩薩が極楽を見る、はこの異変の続きであり、聴衆に極楽を直接見せることの代わりであると見なせるかもしれない。こうして長経が一連の決まり文句で結論を述べ終わるとき、われわれ読者（聴衆）には阿弥陀仏と極楽の生き生きとしたイメージが残される。われわれは阿難と弥勒の目を通して阿弥陀仏とその極楽の景観を与えられるのであるが、古代インドの読者や聴衆と同じように、この説法の会衆たちに自己を同一化するのである。  
(Amita Buddha: Light Beyond Measure, Life Beyond this World, pp. 57-59)

#### 〈結びと移行 (Epilogue and Transition)〉

著者は中国版の短・長経について語る前に、これら二つの經典がインドの伝統的な仏教思想の中でどのように捉えられてい

たかを考察している。著者によれば、仏国土を浄化する誓願を理解し仏国土信仰のある種の秩序の中に置こうとする試みが瑜伽行派の文献の中に見られる。アサンガの『撰大乘論』、シーラバドラの『仏地経論』、ダルマパーラの教説に基づいて玄奘が編纂翻訳した『成唯識論』の三つの著作はこの主題にある程度詳しく触れている。これらはいずれも二つの經典に直接言及していないが、仏国土理論の体系的な姿を提示しようとしている。特に、解放理論と専門的仏教学の用語によって信仰の体系を意味づけようとしている。(Buddha-fields, Buddha-bodies, p. 117)

次に、著者は東アジアの浄土信仰の伝統に大きな影響を与えた三つの著作を考察する。ナーガールジュナに帰せられる『大智度論』と『十住毘婆沙論』、ヴァスバンドゥに帰せられる『浄土論』であり、いずれも漢訳でしか現存していない。著者は、これらの著作の作者や成立地などには疑問を呈しながらも、東アジアに与えた影響の大きさゆえ、それらテキストの意味を検討している。『大智度論』はナーガールジュナに帰せられる大品般若経の注釈であるが、多分、仏国土の教義に対する最も古い分析的考察の一つを含んでいる。仏国土、それを主宰する仏陀、彼らの後光の明るさについて考察しており、阿弥陀の極楽を全ての仏国土のパラダイムあるいは原型と見ている。『大智度論』は短・長経に関してなら解釈的な考察をしていないが、經典の基礎にある教義的構造を形作っている信仰体系を認識している。また、誓願は仏陀たることの獲得と清浄な仏国土

の創造に対して必要な力であると見ていることは留意しておくべきである。

『十住毘婆沙論』は『十地経』に対する注釈でありナーガールジュナに帰せられている。このテキストに関して著者は次のように語る。中国の浄土思想家たちはこのテキストが易行について語ることに、すなわち極楽への往生を専ら語ることに焦点を当てる傾向があるが、このテキストの仏国土についての多くの題材は誓願を中心とした信の詩的な告白の形になっている。これは阿弥陀仏への信を専ら実践することを肯定するものではなく、まして称名を基礎とした行を肯定するものではない。これは誓願の力を肯定することに向けられたテキストであり、廻向の力を主張している。廻向とはここでは特に功德の流れの反転である。われわれの有限な功德を極楽への往生に振り向けることによって、われわれは阿弥陀仏の無限の功德の廻向にあずかることができるのである。

『浄土論』は長経に対する注釈でありヴァスバンドゥに帰せられている。このテキストは中国において高い関心が保持されたからというばかりでなく、長経の実践的な文脈についての価値ある源泉として重要であると著者は指摘する。周知のように、『浄土論』は阿弥陀の浄土に往生しようとの願いの実践に関して五門を提示する。第一の門(礼拝門)は礼拝や平伏などの身体でもっての崇拜である。第二の門(讚嘆門)は称賛などの言葉でもっての崇拜である。第三の門(作願門)は止、すなわち晴朗な心の集中、一心性である。第四の門(観察門)は観、す

なわち瞑想による観察である。第五の門（廻向門）は功德の廻向である。（The Vows, pp. 119-121）

この『浄土論』は東アジアでは違ったように読まれていると著者は語る。中国の注釈者や日本の改革者の目を通すと、このテキストは異なった強調が起り、テキストが語らないままにしているものに幾分触れることになる。『浄土論』は、学問的な整然さにもかかわらず、功德と努力に関して經典のあいまいさを共有している。それゆえ多くの扉が開かれたままでもある。五門は献身の祈りの形であるが、一方では瞑想の形である。それらは救いの希望と覺りを獲得したという確信を表現する。しかしそれらはまた振り向け・努力・方向感覚を要求する実践道を規定する。（Merit and Effort, pp. 121-122）

〈中国版に對する序論（Introduction to the Chinese Versions）〉

短經の中国版は鳩摩羅什訳と玄奘訳の二つが現存している。この中、文章が簡潔で洗練されていることから、東アジアでは専ら鳩摩羅什訳『阿弥陀經』（小經）が愛用され、儀式などで誦読されてきた。長經の中国版は五つが現存しているが、康僧鎧訳の『無量壽經』（大經）が用いられる。これは長くて物語も複雑なため『阿弥陀經』ほど広くは読まれないが、はるかに大きな教義的權威を持っている。

中国において聖典編纂がなされていく中で、これら二つの經典は『觀無量壽經』などとともて浄土信仰の聖典の中に含めら

れていく。その際、中国では『觀無量壽經』により大きな權威を認める立場も出てくる。日本でも「浄土三部經」として小經・大經・觀經の三つは一組のものと考えられている。著者は、東アジアの文脈においては二つの經典の解釈は大きく觀經に依存しており、ある意味では觀經はそれら二つの經典に對する一種の注釈であるとも見なせると述べ、その重要性を指摘しながらも、当該翻訳研究に觀經を含めない。その理由として著者は、觀經は対応するサンスクリットテキストが現存しない上テキストそのものもインド撰述ではないと考えられること、三つのテキストを教義的な単位としてまとめることは後代のこと（十三世紀の日本）であり阿弥陀とその浄土への信を取入れた全ての伝統を通じては認められないこと、さらには觀經は二つの經典の解釈をコントロールする唯一の源泉ではないこと（たとえば『般舟三昧經』の重要性）、を挙げている。（The Two Texts, pp. 125-128）

次に著者は短・長經のサンスクリット版と中国版を比較して次のように述べる。二つの經典の中国版はそれと対応するサンスクリット版と根本的には異なっていない。鳩摩羅什訳の短經は玄奘訳のそれよりも洗練されており、しかも現存のサンスクリット版にもより近いものである。玄奘訳は中国人読者のために術語を語義解説する箇所が見られ鳩摩羅什のものよりも詳細で長くなっているが、本質的には現存のサンスクリット版と同じものである。一方、康僧鎧訳の長經は多くの面で対応するサンスクリット版とは異なっている。物語の順序が異なり、内

容の違いは全体に亘っており、重要なテーマに関して付加や省略が起こっている。しかし並行することの方が相違することよりも多いので、一方の版を理解するために他方の版を読むことは有用である。ちなみに、長経にはサンスクリット版、五つの漢訳（支謙・支婁迦讖・菩提流支・康僧鎧・法賢訳）、チベット訳が現存している。

康僧鎧訳はサンスクリット版にない二つの長い節を持つていることが知られている。このことに関して著者は次のように語る。一つは典型的な菩薩の生のあり方を描写したもので、菩提流支の翻訳にも見られる。もう一つはいわゆる「三毒五悪段」で、善悪とその結果についての中国的思考方を示したものであるかもしれない。これは支謙と支婁迦讖の翻訳にも見られ、東アジアの解釈では末法と関係づけられている。多分これら二つの節はいつどこかは判らないが書き加えられたものである。法蔵菩薩の誓願は長経の現存する全ての版に出ている。これらでサンスクリット版の四七願と漢訳の四八願の内容と順序の違いに多くの注意が向けられてきたが、最も初期の漢訳（支謙と支婁迦讖に帰せられるもの）は少なくとも康僧鎧訳の誓願の中、二〇願（第二六―三四、第三七―四八願）が含まれていないと指摘する。これらの相違については、「補遺」の表にまとめられている。（Dates and Contents, pp. 128-131）

次に著者は短・長経（それに『観無量寿経』）に対する東アジアの伝統的な解釈の中に三つの中心的なテーマがあることに留意を促す。(1) 經典への信から起こる行、(2) 誓願が核となるこ

と、(3) 信と慈悲の教義、である。時間が経過するにつれ、阿弥陀仏への信についてのこれら三つの位相は二つの經典の物語から独立した生命を持ち始め、それが逆に經典を読む方向をも色づけし始める。(1) に関しては、經典を読むことによる阿弥陀と極楽の視覚化が阿弥陀仏の名を称えるという行を起こさせることになったことである。(2) に関しては、法蔵菩薩の誓願は長経の核となるメッセージであり、それが短経・観経の中心となる教えとしても見られるようになったことである。(3) に関しては、先の二つに並行するものであるが、阿弥陀仏への信は慈悲・信仰・献身の教義と結びつくことである。誓願の力は移すことができるもの、完全に信頼して献身する信者たちの近づくことができるものと見ることができ。献身の高度な表現の一つは救済者の名前をつつましく称えることである。（Scripture and Tradition, pp. 137-138）

次に著者は中国版における誓願、称名、信がインドのそれよりも純粋な信の方向へ移行していることを指摘する。誓願は、単純に阿弥陀仏に呼び掛けることが極楽への往生獲得の保証として捉えられる。この移行は名前の持つ力への信仰・誠実な献身の力のように、別な大乘經典やインドの他の宗教にも見いだされるが、阿弥陀仏への信の伝統の中で純粋な信の教義へ移行したのは、この伝統が中国へ伝わり六、七世紀になってからであると思うられる。（The Vows, pp. 138-139）

また、中国版における誓願の解釈に対する最も重要ななじれは、誓願を凡夫に対する仏陀の贈り物を表現するものとして捉

える方向への移行である。誓願の教義は菩薩がせいぜい非常に不完全な功德を持つことしか望み得ない者たちと無限の功德を共有する教義であるから、これはある程度まで正当化される移行である。(Grace, p. 140)

序論を通して著者の短・長経に対する基本的理解の幾つかを見てきたが、重要な指摘も数多く見受けられる。たとえば、大乘の信の仏教への移行の中で法蔵菩薩の誓願の持つ意味、二つの經典における釈迦牟尼仏の役割、などについて注目すべき見解が示されている。テキストに対する著者の基本的立場は、ある特定の注釈の伝統に基づいてテキスト・版を解釈するのではなく、そのテキスト・版が出現した伝統の持つ文脈との関係の中で解釈しようとするところにあるように思われる。二つの經典のサンسكريット版は中国版やその東アジアの注釈の伝統と切り離して、インドの大乗仏教の伝統、特に菩薩道・誓願・仏国土・信などの関連の中で理解されている。中国版に関して、著者は、自らの翻訳が特定のどんな東アジアの注釈にも従っていないこと、それら注釈や注釈の伝統についての理解と中国版テキストそのものが許容するであろう理解とを区別しようとし

たこと、そしてサンسكريット版についての知識をできるだけ中国版の理解ために持ち込まないようにしたこと、を表明している。この立場は学問的立場として承認できるものであり、それに基づいた著者の理解は、二つの經典に対するわれわれの理解に多くの新たな広がりを示してくれるばかりでなく、他の經典に対するわれわれのアプローチの仕方にも多くの示唆を与えてくれるものである。

また、それぞれの翻訳も特別な仏教知識がなくても理解が可能な読みやすいものになっており、序論や補遺も含めて本書(自由訳)は十分に著者の意に沿ったものに仕上がっているように思われ、したがって、仏教に関心のある一般の読者に広く受け入れられるであろう。また、先にも述べたように、本書は著者の深く広い学問的立場と仏教学的知識に基づいた確実な成果となっており、続いて出版される予定の第二、三巻と相俟って仏教の専門家をも裨益すること大であろう。第二、三巻の専門的翻訳の出版が待たれるところである。

(University of Hawaii) Press, Honolulu and Higashi Honganji Shin-shu Orani-ha, Kyoto, 1997, xvi + 358 pages)